

篠原 尚, 水野恵文, 牧野尚彦 (著)

イラストレイテッド外科手術 (第3版)

膜の解剖からみた術式のポイント

坂井義治

京都大大学院教授・消化管外科学

篠原尚先生・他著による『イラストレイテッド外科手術』第3版を手にした。第1版、第2版ともに購入したものの残念ながら既に私の手元にはない。研修医に貸したまま戻って来ないのである。彼らがボロボロになるまで毎日この本で手術の予習・復習をしている姿を見るにつけ、“自分で買えよ”とは言えず、そのままになってしまった。年代を越えてこれだけ愛読されている外科手術書が他にあらうだろうか？

あらためて第3版をめくる。時代の趨勢で器械吻合のイラストが増えているものの、胃癌手術の際の十二指腸切離・吻合や脾臓脱転操作のイラストを見ると、私自身も県尼(兵庫県立尼崎病院の略称)で指導を受けた牧野尚彦先生の手術操作が蘇る。それほどに著者篠原先生の感性がイラストに凝集、注入され、写真とは異なる“実際”を描写しているともいえる。

デジタル技術の進歩と内視鏡手術の普及により、昨今の学会のビデオセッションは立ち見が出るほ

どの盛況である。しかし、ふと考えてしまう。これほど頻繁にビデオセッションが開催されているが果たしてどれほど参加者の技量向上に役立っているのだろうか？

アニメを見るのと同様に他人のビデオを見ている時は、能動的な思考をする時間が許されない。目の前を美しい映像が流れていき、あたかも自分もできるような気持ちになるが、その場面の詳細を後で思い出すことは極めて困難である。もちろん記録されたDVDを繰り返し見ることによって詳細なイメージを記憶にとどめることは可能ではあるが…。それに対して、鮮明な静止画は見る者に想像し思考する時間を与えてくれる。さらに恩師牧野先生が本書【初版の序】に記載されているように、“強調と省略とがほどよくミックスされて洗練されていった”イラストは臨場感とともに最も重要なポイントを明確に教示してくれる。そのイラストが的確な言葉による解説付きであるなら手技のエッセンスの把握はなおいっそう容易となる。的確

な言葉を使うことは難しい。しかし、本書第1章の【プロローグ】の“筋膜 fascia”の解説や“「AとBの間に筋膜は何枚あるか？」という議論は時として無意味である”との説明を読むと、著者が読者に具体的なイメージを形成してもらうために、どれほど慎重に“的確な言葉”を選択したかおもんばかることができる。

著者に天性の画才があることは周囲の誰もが認めている。しかし、それ以上に彼が費やした手術記録記載の時間、その反復推敲の時間と努力は想像を絶するものであろう。その努力にただただ敬服するのみである。外科研修医ばかりでなく、私も含めた“経験ある”外科医も今一度、外科手術教科書として比類なき本書を手に取り、外科手術教育を再考したいと思う。

●A4/頁 500/2010 年/定価 10,500 円 (本体 10,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01023-8]
医学書院 刊